

# 天：複数の天はあるのか？

Copyright©2011Mormon Outreach Ministries, Sydney

モルモン教会として知られる末日聖徒イエス・キリスト教会は、天は三つの王国または栄光の階級に分かれていると教えており、コリント人への第一の手紙 15:41 とコリント人への第二の手紙 12:2-4 をその教理の根拠としています。多くの古代人は複数の天を考えていました。旧約聖書では「天」のヘブライ語は常に複数形で、このことを反映して新約聖書と七十人訳聖書（キリスト教以前のユダヤ教聖典（旧約聖書）のギリシア語訳）では複数形の「天」の言葉がしばしば使われています<sup>1</sup>。ヘブル人への手紙 4:14 はイエスは「もろもろの天を歩いていかれた」と述べています。天は複数でしょうか。パウロは実際にコリント第一 15 章とコリント第二 12 章で三つの天を教えているのでしょうか。モルモン教会が教えるようにパラダイスと天は異なるのでしょうか。これらの疑問を解決するために、モルモン教の天の教理と聖書にある天について慎重に比較する必要があります。

## I 最終的な運命は天と地獄以外にあるのでしょうか？ 複数の天はあるのでしょうか？

モルモン教会は最終的な運命は四つの階級に分かれていると教えています。最低の階級から最高の階級への順は、外の暗闇（悪魔の国）、それから一星の栄えの王国、月の栄えの王国、日の栄えの王国（「神の王国」ともいわれる）<sup>1</sup> という三つの天の階級となっています<sup>2</sup>（『福音の原則』第 46 章—モルモン教会公式の学習テキスト、『教義と聖約』76 章—『教義と聖約』はモルモン教「標準聖典」（正式に認められ、権威あるものとされたモルモン正典）の一つ）。モルモン教会では「破滅の息子」を除く邪悪の人を含むほとんどの人は星の栄えの王国に送られ、「イエスの福音と証を受け入れながら雄々しくなかった人々」や高潔であった非モルモン信者は月の栄えに送られるが、忠実なモルモン教徒は日の栄えの王国を受け継ぐと教えられています<sup>3</sup>。

モルモン教会では日の栄えの王国を受け継ぐ者だけが永遠に天の御父とイエス・キリスト前に住むとも教えられています（『教義と聖約』76:62）。モルモン教会は「日の栄えの栄光には、三つの天、すなわち三つの階級がある」（『教義と聖約』131:1）とも教えています。日の栄えの王国の最高の階級は「昇栄」（「永遠の命」ともいわれる）で、永遠にわたって神として存在し、永遠に霊の子供をもうけることができるということです（『福音の原則』第 47 章、『教義と聖約』131:1-4、132:19-25、30、55）。

これとは対照的に、聖書では最終的な運命は「永遠の天国」か「永遠の地獄」の二つだけを教えています（ダニエル 12:2、マタイ 25:31-46、テサロニケ第二 1:5-9）。このことは各自が地上にいる時、永遠の命を無償の贈り物として受け入れたか否かにもとずいています（ヨハネ 3:16-17、使徒行伝 16:31）。

聖書は、（恵みにより）信仰により永遠の命を授かったすべてのクリスチャンは、天で主の御顔を仰ぎ見ながら神とともに永遠に住むと教えています（エペソ 2:8、マタイ 25:31-46、黙示録 21:3-4、23、22:3-4）。聖書ではわたしたちは神々になれるとは決して約束されてはいません。聖書はまことに三つの天を述べていますが（コリント第二 12:2-4）、人が永遠に過ごす三つの天は教えていません。

## II パウロは（コリント第一 15:41 とコリント第二 12:2-4）で三つの天を教えているのでしょうか？

### （コリント第一 15:40-41）

<sup>40</sup> 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。<sup>41</sup> 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。（口語訳）

モルモン教会は聖書のコリント第一 15:41 で三つの天または三つの栄光の段階を教えていると主張しています。「日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光があるまた、この星とあの星との間に、栄光の差がある」だからだそうです。モルモン教理では太陽、月と星はそれぞれ日の栄えの王国、月の栄えの王国、星の栄えの王国の象徴で復活した人が永遠に過ごすということになっています。（『教義と聖約』76:70-71、81、96）

しかし、「地に属するからだ」と「天に属するからだ」の二種類のからだを扱っている箇所にもルモン教理の三つの王国を読み取ることはできません。コリント第一 15:40-41 の文脈は天の国ではなく、地に属するからだと身体の甦りの後に与えられる将来のからだの違いについてです。聖句の文脈は 35 節に設定されていて、パウロは二つの質問をしています。「どんなふうにして死人がよみがえるのか。どんなからだをしてくるのか」。地上のからだは「朽ちる」もので（42 節、53 節）「卑しい」、{弱い}もの（43 節）で肉の体（44 節）ですが、天に属するからだは朽ちることがなく（42 節、53 節）、栄光あるもの、強いもの（43 節）で霊の体（44 節）です。<sup>4</sup>

### （コリント第二 12:2-4）

<sup>2</sup> わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた—それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。<sup>3</sup> この人が—それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである—<sup>4</sup> パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。

モルモン教会はコリント人への第二の手紙 12:2-4 で三つの天または三つの栄光の段階を教えているとも主張しています。パウロが「第三の天にまで引き上げられた」人のことを述べているからだそうです。

聖書は「第三の天」のことを述べてはいますが（コリント第二 12:2-4）多様の天のことは示唆していません。第一の天は鳥や雲のある大気（創世記 1:20、詩篇 147:8、申命記 11:11）、第二の天は太陽、月や星が見られる空（創世記 1:14）であり、第三の天は最も高い天で、クリスチャンが死後行く神のすみか（イザヤ 63:15、列王紀上 8:30）です。コリント第二 12:2-4 でパウロが述べているのは後者の天—神のすみか—のことであり、4 節では第三の天をパラダイスと一致させています。ヘブル人への手紙 4:14 ではイエスは「もろもろの天を歩いていかれた」と述べられています。このことはイエスは大気の天と星空の天を歩いて行かれて、もっとも高い天（第三の天）に住まわれていることを意味しています。

コリント第二 12:4 では第三の天はパラダイスと同義語ですが、モルモン教理では「パラダイス」は天の三つの栄光の階級のいずれとも異なることになっています。モルモン教理の「パラダイス」とは何でしょう。聖書はパラダイスについてどう述べているのでしょうか。

### III 死後わたしたちはどうなるのでしょうか？ パラダイスとは何なのでしょう？

モルモン教会は死後私たちの霊は霊界に行くと考えていますが、霊界には「パラダイス」と「霊の獄」と二つの区分すなわち状態があることになっています（『福音の原則』第 41 章）。また天の国は「パラダイス」とは違うそうです。モルモン教理の「パラダイス」は義の人々の魂が死後に行く霊界の区分で、最後の審判前にいる一時的な場所ということ（『福音の原則』第 41 章）。（MOM サイト「地獄：一時的な苦しみの場所それとも永遠の刑罰の場所」参照）

これとは対照的に、聖書は新約聖書で啓示されたキリストにあって死んだ者の魂は、直ちに主の御前に行き主との交わりを享受すると教えています（ルカ 23:43、ピリピ人への手紙 1:3、コリント第二 5:8）<sup>5</sup>。新約聖書にあるキリストなしに死ぬ者の魂は直ちに永遠の刑罰の状態に行きます（ルカ 16:24-26）。こういった人の体は最終的な裁きの日まで復活することはありません（ヨハネ 5:28-29、使徒行伝 24:15）。

ギリシア語の「パラダイス」は新約聖書以外ではいろいろな意味に使われていますが、新約聖書では次の三箇所使われています。①「第三の天」（コリント第二 12:4）。②（イエスの横で十字架にかけられた罪を自覚した）犯罪人に（イエスが）約束された至福の場所（ルカ 23:43）。③約束の「いのちの木の実」のある場所（黙示録 2:7）<sup>6</sup>。イエスはルカ 23:43 で「パラダイス」という言葉を一度だけ用いました。（イエスの横で十字架にかけられた）犯罪人はまもなく死ぬという時、イエスに救いを求めて頼りました。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と、そしてイエスは受け入れています。イエスは天の至福をその日に約束しました。「よく言うておくと、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。イエスに赦しをもとめた犯罪人はイエスと一緒にパラダイスにいるのです。

わたしたちの良い行いは私たちを救うことはできません。前述の犯罪人はよい者とされるに十分ではありません。神ひとりのほかはよい者はいません（マルコ 10:18）。この世で最も良い人でさえ神の完全な標準には達しません。「われわれはみな汚れた人となり、われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである。われわれはみな木の葉のように枯れ、われわれの不義は風のようにわれわれを吹き去る」（イザヤ 64:6）「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない」（伝道の書 7:20）（詩篇 14:3、ローマ 3:10-18 参照）神は永遠の命に入る必要条件を下げることはできません。神はあわれみのゆえにあなたや私が神の前で正しいと宣言される唯一の方法を提供されました。十字架のキリストの御業に対してのわたしたちの信仰だけがわたしたちを救います。永遠の命は贈り物です。チトス 3:5 は「わたしたちの業によってではなく、ただ神のあわれみによって……わたしたちは救われたのである」と述べています（エペソ 2:8-9；テモテ第二 1:9 参照）。

聖書はわたしたちは皆、神の裁きの座の前に立ち（マタイ 12:36、コリント第二 5:9-10、ローマ 14:10）、新約聖書の「キリストを信じる信仰によって救われる」ことなく死んだ人々は罰せられるますが（黙示録 11:18）、新約聖書のイエスにある者の裁きは信仰の評価、報酬授与（ヨハネ 5:24、ローマ 8:1、黙示録 11:18）と教えています（ヨハネ 5:24、ローマ 8:1、黙示録 11:18）。「よくよくあなたがたに言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである」とイエスは言われました（ヨハネ 5:24）。ヨハネの黙示録 21:8 で、（キリストを）「信じない者」は火の池に投げ入れられる人々の中に入っています。新約聖書の「キリストを信じる信仰によって救われる」ことなく死んだ、道徳的で立派な人も「信じない者」に含まれています。こういった人々は聖書の神に反抗する生き方を示しました。

**結論：**人が永遠に住む三つの栄光の階級があるとは聖書のどこにも教えていません。聖書は一大気の大気、太陽、月や星がある天と神のすみかである天一の三つの天を教えてください。パウロがコリント第二 12:2-4 で述べているのは最後に述べた天または第三の天です。パウロはわたしたちが「肉体から離れる」ときが来るとき、「この世を去ってキリストと共にいる」（ピリピ 1:22-23）ことを確信していました。「よく言うておくと、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。神のみ言葉は死ぬ寸前でも悔い改めた人は神とパラダイスにいることもあると述べています。これはまた、一生の間に無償の賜物である永遠の命の賜物を受け入れているすべての人への約束事です（ヨハネ 3:16-17、使徒行伝 16:31）。

## 文末脚注

- 1 F.F. Bruce, *The Epistle to the Hebrews*, NICNT (Grand Rapids, Eerdmans, 1990) p.115
- 2 John Farkas, "AFTERLIFE" in *MORMON TERMINOLOGY* (New York, Berean Christian Ministries)
- 3 「日の光栄を受け継ぐ条件」については『福音の原則』(272頁)と『教義と聖約』76:50-53参照。  
「これ以外に日の光栄を受け継ぐ人」については『教義と聖約』137:7-10参照。(モルモン教会の)「福音を知らずに死んだ者で、真心からそれを受け入れたであろう者」(『教義と聖約』137:8)と「責任を負う年齢に達する前に死ぬ子供たち」(『教義と聖約』137:10)はみな日の光栄を受け継ぐことになっています。
- 4 41節の日、月、星ということばが異なる栄光を示していると主張する末日聖徒もいます。しかし、文脈は天の国のことではなく「からだ」に言及しています。
- 5 クリスマンの中には、イエスの復活後は、キリストにある信者の魂は直接天の神のみ前に行ったが、イエスの復活以前の信者の魂は、天の祝福にあずかることなく、黄泉(よみ)の国一天の神のみ前から離れて待っている場所—に行ったと、考える人がいます。しかし、旧約聖書の聖徒は死に面したとき喜びを表しています(民数記23:10、詩篇16:11、17:15、73:24、箴言14:32)[Louis Berkhof, *Systematic Theology*, London The Banner of Truth Trust, 1959, p.685]。聖書の教師のウエイン・グルデムは「旧約聖書の聖徒は死後、直接神のみ前に行き神との交わりを享受した可能性が高いように思われる」と述べています[Wayne Grudem, *Systematic Theology* (Leicester, IVP, 1994) p.821-822]。エリヤはつむじ風に乗って天に昇りました。黄泉の国に入ったわけではありません(列王紀下2:11)。マタイ22:32でイエスはサドカイ人に次のように言っています。神は燃えるしばの中で「『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」。(この時点でアブラハム、イサク、ヤコブはずいぶん昔に死んでいましたが)アブラハム、イサク、ヤコブは生きており、神と途切れることのない交わりを持っている事を暗示しています。
- 6 Wayne Grudem, *Systematic Theology* (Leicester, IVP, 1994)p.593